

症が5例, 黄色靭帯石灰化症が2例, その他は変形性頸椎症であった. 腰椎病変は1例が腰部椎間板ヘルニアで9例が腰椎変性すべり症で, 残りは腰部脊椎症であった. 手術法は頸椎病変は前方除圧が28例, 後方除圧が12例で, 腰椎病変は1例が椎間板ヘルニア摘出で残り37例が後方除圧であった. 症状の発現は17例が上肢の症状からで, 22例は腰痛または下肢の症状からで, 1例のみ頸部痛と腰痛を同時期に発症していた. 手術の順番は頸椎を先に施行したのが33例で, 腰椎が先のものが7例であった. 頸椎・腰椎病変合併症例の手術法, 手術の順番, 手術時期, 症状の変化等について報告する.

35 重症脳室炎の一治療例

久保 慶高・田口 壮一
 冨塚 信彦・小笠原邦昭 (岩手医科大学)
 小川 彰 (脳神経外科)
 小暮 哲夫 (総合花巻病院)
 (脳神経外科)

症例は60才男性で, 頭痛, 発熱, 意識障害で発症した. CT上, 左前頭葉に造影される mass を認め, H3/3/28に治療目的に当科入院となった. 来院時のMRIで左前頭葉に広範な浮腫を伴う造影される mass を認め, 脳室側への破裂も示唆された. 入院翌日に局麻下で膿瘍と脳室にドレナージを施行した. 膿瘍と脳室は交通, とともに膿汁が貯留していたため, 洗浄した. 膿汁の細菌培養では streptococcus が検出され, さらにβD グルカンが異常高値を示したため, 細菌, 真菌の混合感染を疑った. 脳室と腰椎ドレーンを留置し, 脳脊髄液洗浄療法を施行した. 洗浄療法終了後は抗生剤の髄注と全身投与を2週間おこない, 手術から4週間後には炎症所見は消失, 髄液所見も正常化し, 6週間後には神経学的脱落症状を残すことなく退院した. 脳室内洗浄法が有効な症例であった.

36 小児 Cushing 病治療寛解後8年で infundibulo-neurohypophysitis を発症した1例

川口 奉洋・池田 秀敏 (東北大学大学院)
 吉本 高志 (神経外科)

【はじめに】12歳時に Cushing 病で発症し, 手術治療にて寛解し, その後8年を経過して neurohypophysitis を発症するという稀な経過をとった症例を経験したので報告する.

症例は21歳, 男性.

【主訴】多飲・多尿.

【現病歴】13歳時肥満・成長障害にて精査の結果, 高コルチゾール血症を指摘され, Cushing 病と診断された. 経蝶型骨洞的手術にて微小腺腫を全摘出し, Cushing 病は寛解した. 1年毎の定期検査でも Cushing 病の再発は認められなかった. 手術より8年を経過したところで, 口渇, 多飲, 多尿が出現した. この時点の内分泌検査では, 下垂体前葉機能は正常であり, Cushing 病の再発の所見は見られなかった. MRIにて下垂体中央部の膨隆と infundibulum-stalk の肥厚とが認められた. Infundibulo-neurohypophysitis の診断で, ステロイドの維持量程度の補充を行った. 尿崩症は, DDAVP でコントロール可能であった. 3ヶ月間ステロイドを補充投与したところ, MRI上, 下垂体の膨隆は消失し, 形態はほぼ正常化した.

【結語】Cushing 病は, 下垂体前葉の病変であり, Infundibulo-neurohypophysitis は基本的には後葉に局限した病変であり, 両者の因果関係は不明である. Cushing 病で発症し, その後長い寛解期を経過して後 neurohypophysitis を発症した症例の報告はなく貴重と考え報告する.

37 術中に急性脳腫脹をきたした破裂細菌性動脈瘤の1例

藤村 幹・永山 徹 (白河厚生総合病院)
 (脳神経外科)

症例は44才女性. 僧房弁閉鎖不全の既往あり. 発熱に続く severe headache あり当科入院. H&K G II, CTにてSAH見られ, CRP 4.3, 血液培養にて Peptostreptococcus sp. が検出された.